

## 第 29 回総合教育会議

### ○藤崎企画監

では、ただいまより第 29 回佐賀県総合教育会議を始めさせていただきます。

本日の会議の進行を務めさせていただきます政策部政策企画監の藤崎でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

本日は、知事、教育長、教育委員の皆様のほか、平尾政策部長が出席しております。

それでは、開会に当たりまして、山口知事から御挨拶を申し上げます。

### ○山口知事

今日もお忙しい中、ありがとうございます。

もう 29 回目ということになりました。せんだっては佐賀県立大学について一定の発表をさせていただきました。大きなポイントは、小中高連携、高大連携といった先進的な取組をやっていきたいと思います。

そして、今日の議題につきましては、1 つは多文化共生ということで、今日の朝刊にも大分外国人が増えていると出ていました。特に伸び率は 3 位だったかな。佐賀県は 28 年ぶりに明らかな社会増となっているわけですが、その大きな要因は外国人が 1,600 人ぐらい増え、日本人は 1,300 人ぐらい減っていると。日本人の減少率も縮まってはいますが、それでも外国人が 1,600 人増えたことによって、300 増えているということで、いよいよ多文化共生が大事で、外国人の皆さん方が佐賀で心地よく暮らし、その後、産業に入っていただき、お互いが心地よく理解が進んでいくという社会をつくっていききたいと思います。

2 番目の少年自然の家につきましては、改めて皆さんの少年自然の家での体験を語っていただきたいと思っています。

隣の長崎県では、千々石の少年自然の家が廃止ということで、今大きなニュースになっています。この位置づけ、考え方を議論できたらうれしく思います。

### ○藤崎企画監

テーマごとに意見交換をさせていただきたいと思っています。

県内の公立小・中学校の日本語指導が必要な児童生徒ですが、右肩上がりに上がっております。令和 6 年 5 月 1 日時点で小学生が 91 人、中学生が 32 人で、計 123 人の生徒が在籍しています。

その背景として、外国籍の方が増え、ほぼ全ての在留資格で増えております。技能実習とか特定技能 1 号の方が非常に多いんですが、家族帯同ができません。留学も増えてきていますが、週の労働時間が 28 時間以内と限られており、家族帯同が見込めない在留資格になっています。

増えているのが、青の身分に基づくもの、国際結婚ですとか、オレンジの技能や専門的な

技術者とか研究者、通訳なども増えており、家族帯同ができる在留資格になっております。

実際、家族滞在という在留資格があるんです。この緑の部分も伸びていまして、ファミリー一層の増加につながっているのではないかと推測されます。

実際の児童生徒数を市町の増減で見てみたのですが、外国人の雇用も増え、小規模ながら企業誘致も増えてきているんですが、なかなか児童生徒数にがつつり相関があるかというところ、複数の同じような状況のものもあれば、佐賀市のように、雇用は増えているけど減っていない。ジグザグであったりとかというような状況になっています。ほかの市町も見てみたんですけど、それほど相関はないというのが現状分かっている状況です。

一方、国際結婚とかも増えてきていますし、留学生も就労は限られていますが、佐賀大学の院生については家族帯同の方もいらっしゃるということで、確実に増える要素はありますが、現状ではあまり相関がなく、いろいろなものの積み重ねによって、全体として増えてきているのかなというような状況になっています。

ここからは佐賀県教育委員会の取組になりますので、甲斐教育長から説明をお願いします。

#### ○甲斐教育長

教育委員会の取組は大きく3つ、日本語指導、多文化理解、そして、彩志学舎中学校における役割についてです。

日本語指導の充実についてですが、まずは日本語指導担当教員を日本語指導が必要な児童生徒 123 人に対して、小学校で5人、県内中学校で2人配置しています。これは教諭の免許、教員資格を持った方で、児童・生徒一人一人に合わせた日本語指導ということで、日本語の能力であったりとか、それまで母国でどんな学習内容を受けてきたかとか、小学校に行ったことがあるかないかで教え方のスタートが違います。そういったことに合わせて簡単な日本語での授業をします。

その子たちや、日本人の生徒たちの多文化理解ということで、お互い仲間として助け合うとか、世界が広がる話だと思います。

それから、職員向けの校内研修ということで、指導担当の先生だけではなく、学校全体でサポートしていく必要がありますので、担任の先生との連携ということも大事になってきます。あと保護者との連絡や面談等のフォローをしています。

それと非常勤講師、こちらは主に初期の日本語指導として生活に必要な会話、「一緒に行こう」、「これ貸して」、「次は何とかだよ」等の、友達づくりができる、安全を守ることができるというところもやりますし、あとは、テストの振り返りをやってみたり、これからこんな行事があるよとか、何月何日ですとか質問のやり取りとか、そういったことをやっています。

関係機関との連携が大事でして、御家族は住んでその地域になじんでいかなきゃいけない。地域ぐるみでということをとを大事にしていきたいと思っています。

日本語指導が必要な児童生徒は、学校には1人から5人未満がほとんどなんですね。日本語指導担当教員は、生徒23人に対して1人です。佐賀市に4人はいるんですが、いろんな学校を掛け持ちしてやっていただきました。1校に1人か2人という形で、やってもらっています。オレンジ色のところが担当教員がいる、緑が非常勤講師をとっているところがございます。

広域に存在していきまして、非常勤講師によるカバーにも限界があります。日常用語と、学習に必要な用語を指導するということが必要になり、指導員の充実が必要だと思います。多文化理解の促進に移ります。高校生の場合、留学生の受け入れ、短期、長期を合わせて大体例年約10人高校に留学生が来ています。海外との学校の交流促進もいろんな高校が相手校を見つけて、オンライン交流、メール、受け入れ等をしています。

あと、海外経験の豊富な方々による講演ということで、佐賀大学、国際交流協会、NPO法人等のいろいろの方々に講演をしていただいています。

取組の効果としては、それがきっかけで興味を持ってもらい、グローバル社会が進んでいると思っています。

彩志学舎中学校についてです。彩志学舎中学校は今21人入学をしております、平日夜間に授業をしています、日本語指導が必要な生徒が5名いらっしゃいます。

#### ○山口知事

外国人は21名中何名なの。

#### ○甲斐教育長

外国籍をお持ちの方が、これプラスになるんですかね、ちょっと外国籍とあまり言ってはいないので、このぐらいと。日本語指導が必要のない方もいらっしゃいます。

生徒一人一人に寄り添った授業ということで、彩志学舎中学校は日本語指導を毎日1時間やっていますので、ほかよりもきめ細かにできていると思っています。以上です。

#### ○藤崎企画監

ありがとうございます。

説明は以上になります。

国籍等にかかわらず、誰もが心地よく過ごせる佐賀県ということで意見交換をいただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

#### ○飯盛（いいもり）委員

今年入って、多文化共生について考えさせていただく機会があったんですが、まず最初にうちの園の現状をお伝えします。定員が120人で、現在11名が外国籍で、10%に近づいています。

ほとんどの方が佐賀大学の院生や博士号課程、また教えていらっしゃる方のお子さんです。ほかは、フィリピンとのハーフとか、中国人の方とか、そういった内訳になります。

園の中では、日本語での集団生活に慣れるよう、いろいろな工夫をしながら、活動で受け入れをしています。大切なのはそこに関わる保護者とのコミュニケーションで、幸いうちの園が私も含めて三、四人英語でコミュニケーションができる人間がいるので、その人たちを介して、保育教諭の先生たちがやり取りをしています。なので、英語が通じる園があるらしいという噂が広がり、問合せは多いです。

ただ、認可を出すのは佐賀市役所なので、外国籍のお子さんだけ特別扱いするわけにはいかず、日本人と同じ形で点数をつけられるので、入れないお子さんたちもいらっしゃいます。

○山口知事

そこは加点されないんだ。

○飯盛（いいもり）委員

加点はないです。

○山口知事

そういうのは考えてあげたらいいのにな。

○平尾政策部長

ほかの園に行くと、結局、先生方は対応できないわけでしょう。

○山口知事

そこはちょっと勉強してみたらいいね。市町の仕事なので、俺たちも支援して何かね。

○飯盛（いいもり）委員

それで、佐賀大学にここ数年いろいろ関わっていて、問題としては佐賀大学のそういう保護者さんって車を持たない人が多いんです。そうすると、住んでいるのは佐賀大学のキャンパスの中とか周りがほとんどなので、徒歩とか自転車で行ける園じゃないと通えないんです。で、市役所に行ったら、「川上の辺に空きがあるって紹介されたんですけど」と言われて、川上まで毎日送迎できないよね、バスで30分以上かかるよって話をして、非現実的なところは受け入れができないので、佐賀大学から1キロ、1.5キロ圏内の園に外国籍のお子さんも散らばっているような感じです。

周りの園長先生たちからも結構相談を受ける宗教食、うちは提供しているんですけど、どういうふうに提供しているとか、そういう問題もあるので。ただ単に受ける以外にも宗教食、アレルギー、入る前に普通のお子さんでもアレルギーがありますかとヒアリングをするん

ですが、結構簡単ではなく、きめ細かな対応が必要な状況ではあります。

○山口知事

いずれは3分の1ぐらい外国人になるので、そこを前提にして制度をつくっておかないと。

○飯盛（いいもり）委員

さっきの内容は、こども未来課の課長さんと交えて一度お話はさせていただきました。

今すぐちょっとこうというのは、制度上は難しい。市が管轄していることなので、なかなか難しいと思うんですけど、いろいろちょっと考えてみますというお答えでした。

○山口知事 でも外国人ということで、加点されないのは不思議だね。

○飯盛（いいもり）委員 そこは平等です。

○山口知事

やっぱり、佐大でも外国人の先生は増えていますか。

○荒木委員

子供が増えたという背景は、大学院生が増えたというのももちろんあるんですが、実はその後の就職において、昔は国費で来たので、国のために国に帰って就職するというのがあったんですが、今は就労ビザも結構緩くなって、県内就職率が上がっています。佐賀大学の留学生の県内就職率も上がってきています。

平成30年が3.8%だったのが、令和5年度は19%と一気に上がっていて、就職して国際結婚だったり、ファミリーをつくって、そこで子どもがという人たちもこれからどんどん増えてくるかなと思いました。

また、それを顕著に思ったのが、私がほほえみ館でもう10年ぐらい小児科医として、3歳半健診とか1歳半健診をしているのですが、昔はお父さんとお母さんの職業が佐賀大学院生とか書いてありました。もちろん今もいますが、最近は、企業の名前が並ぶようになってきていて、そこでやっぱり私がぶつかるのが言語の壁、私もあまりしゃべれないので、国際交流協会の方がボランティアで一緒に来てくれます。なので、ボランティアの方に話しながらお母さんに聞くみたいな感じなんですけど、他人を通すことになるので、なかなか伝えづらい。お子さんのことがちょっと心配だなと思っても、人を介すので難しいし、言語が伝わりにくいこととかもあって、たくさん外国人が増えてきて、価値観が違うので大変だなと思っていました。

○飯盛（いいもり）委員

さっき診断の話で、先生からいいですか。

○飯盛（いさかり）委員

清和高校は1,000人ぐらい高校生がいて、アジア系も含めると10名ほど外国籍の生徒さんがいますが、日本語に困るという生徒はもう今はいません。ただ、担任等が困るのは保護者との連絡、なかなか通じない。それらの小学校の教員を配置している学校でもやはり同じ問題があります。文書で配っても、まず時候の挨拶から始まったり、その辺が翻訳機で出てこないんです。1回1回電話でやり取りしなきゃいけない。

例えば、行事があるときに、今度これとこれを持ってきてくださいというようなことも、家庭に連絡をしたほうが確実だからというようなことで、この辺りが時間がかかって大変だということを言っていました。

あともう一つは、日本語がほかの子と比べると入っていきにくい生徒がいる場合、それがその子の特性によるものなのかどうかを検査したいが、それが簡単にいかない。WISCという知能検査があるのですが、全部日本語なので、簡単には受けさせることができません。その場合はほかの機関につなげますが、そこまでなかなか進めないといった問題があるというふうに聞いています。

以上です。

○飯盛（いさかり）委員

十分じゃないんですけど、子どもに対する日本語指導ということは、子供たちは週に何回かマンツーマンで受れたり。ただ、日常生活で友達との会話でやっぱり上達していくのは早いと思います。ところが、保護者となると壁があるんですね。問題かなと思います。

○甲斐教育長

子どもたちは多分一、二年ぐらいで日常会話ができるようになります。

○山口知事

保護者とかは、それこそ彩志学舎中学校に行ってもいいわけだね。

○甲斐教育長

もちろん、彩志学舎中学校に行けばいいけど、全ての教科を受けていただくことにはなりません。地域でも日本語教室等あります。

○山口知事

その辺は黒岩さんのほうがいろいろとあっせんしているわけだからね。

○甲斐教育長

そうですね、国際交流協会とか、あと技能実習の方とかもいらっしゃるから、そういう地域とつながったほうが地域で生活がしやすいんじゃないかなと思っています。

○山口知事

加藤さんのところは外国人はそんなに……。

○加藤委員

うちは困ったケースが過去あったんですが、お母さんがフィリピン人で、お父さんは日本人なんです。結婚して子どもが生まれて、お父さんが妻と子どもに虐待していたんです。子どもはもう日本語がしゃべれるんですけど、お母さんはしゃべれないので、そのケアを学校がどこまで入っていいのかすごく苦労しました。お母さんが相談できるところが、英語でもあればよかったんですが、道筋がつかれなかったと。子どもは多分中学校の頃から不登校になっていて、うちに来たというケースがあります。

○山口知事

これは親しゃべれない問題ってある。

○飯盛（いいもり）委員

あとよく聞くのがヤングケアラー、子どもたちは習得が早いからしゃべれるようになるんですけど、親がしゃべれないから、親の通訳みたいな感じで、子どもが何かいろいろついていけないといけないと。

○山口知事

大人になってから語学習得するのは難しいと思うんだよね。今からスペイン語と言われてもね。

○加藤委員

入ってこないです。

○山口知事

きっとそこからいろんなストレスを抱える方は多いでしょうからね。子どもはみんなしゃべっているのに、何か親がね。

○平尾政策部長

授業参観とか行っても日本語が分られない保護者の方は困るでしょうね。

○山口知事

牟田さんの業界は、そういう問題は抱えていないんですか。

○牟田委員

抱えていません。

○甲斐教育長

多文化理解についてですが、そういう保護者が学校に来て、自分の母国の文化を話してくれ、理解が進むとか、そういった学校づくりというものもやっていたりします。佐賀に住んでいる外国人がぽつんとならないような。

○山口知事

あと語学の問題のほかにそれぞれの文化、だから日本の価値観だけじゃなくて、いろんな人があっていいんだというところはどうか、浸透していけばいいけど、これに合わせてさ。風習とか習慣とか、食生活から何から。

○甲斐教育長

外国籍の給食ってどんなメニューがいいかって皆さんで出して投票して、今日はこの国の給食とありました。

○山口知事

そういうのは作れるの。

○甲斐教育長

そこは単独給食ですね。センター式じゃなくて自校式の給食のところ。

○飯盛（いさかり）委員

メニューは栄養士が、学校栄養士が立てるから。

○甲斐教育長

多分いろいろ調べて作られるんだと思います。自然と子どもたちが写真を撮る。

○飯盛（いさかり）委員

国際交流活動で留学してきた子たちとの交流なんかは、非常に子ども同士、生徒同士はうまくいくというか、日本人のほうに興味を持って接してくる。困っていることがあったら助



けてあげるといようなことは、ほとんどの生徒が同じような気持ちを持っている。私の私見ですが、もっと日本人同士に与えてくれれば、いじめももっと減るんじゃないかなと思うんですけどね。

○山口知事

そうそう、ある部分、共通していますからね。いろいろなところを聞いたりするところは。

○飯盛（いいもり）委員

国際交流って、実際に行くのが多分ベストだと思うんですけど、やっぱりお金もかかります。

去年、私の友人が今、沖縄の米軍基地で働いていて、そこから日本全国にある米軍基地の学校の国際交流を担当している方を紹介してもらったので、その方と教育振興課の担当の方をつないでもらって、何校かオンライン交流でつながったんですね。行くことはできないけど、画面越しに話したり。だから、手を挙げる学校が増えれば、こういう活動が増えるのかなあと思います。

○牟田委員

そんなすてきなことをしていたら、もっとそれはマスコミに流してくださればよかったのに。

○飯盛（いいもり）委員

アイラブ佐賀なので、佐賀のためだったら。

前からアメリカの学校とつないだり、昭栄中学校とつなぎはしたんですが、時差の関係で、画面越しには難しいじゃないですか。だから、縦の線で紹介できるんだったら、オーストラリアやニュージーランドであれば、時差があまりない。そこで、思いついたのが、米軍基地だったら日本時間だということで。佐世保だったら、実際に行くことも可能です。

○山口知事　うちの娘も佐世保の基地に何日か家庭留学したような気がします。

○甲斐教育長

結構やっていますね。1週間とか2週間とか、オーストラリアとか、イギリスとか。

○牟田委員

そういうのは今年もやるの、米軍の小学校とつなぐやつ。

○飯盛（いいもり）委員

おつなぎしたから、ずっと継続的に。

○藤崎企画監

まだちょっとできていませんけど。

○牟田委員

ぜひやって。

○飯盛（いいもり）委員

候補が上がったのが、岩国とか、佐世保とか、三沢とかあったんですけど、佐世保が一番つながった後いいかなと。

○山口知事

そうだね、近いしね。

○飯盛（いいもり）委員

武雄とか、あっちのほうの学校だったらすぐ行けますし。

○山口知事

あと感じたのは、そういうのを学校が手を挙げたりするわけでしょう。

○飯盛（いいもり）委員

そこなんですよ。

○山口知事

だから、個性ある学校というか、いつも言うじゃない、県立高校って十把一絡げだって。三養基高校だとか、小城高校だって、そこで何か一つのそういうのをつくり出してほしいなと。人事異動でたまたまじゃなくて、もうここの特徴だみたいなので、そういう先生を、多分その人がやる気ある人がいたからだと思います。

○飯盛（いいもり）委員

やっぱりその担当の先生が興味があって、こういうのを子どもたちにさせないと思わないと手は挙がらない。

○山口知事

一律でやる必要はないんだからさ、何かいいんじゃない、そういうまだら模様で、個性で、それぞれの学校ごとで。

○甲斐教育長

突き抜けていければ。

○山口知事

教育委員会通知で全員でやりなよだったらみんな疲れちゃうから。

○飯盛（いいもり）委員

だから、去年1年やられていると思うので、その実績と、楽しかったよみたいなのを広げるといいのかなと。

○山口知事

これは定点監視しよう、またさ、この課題は。間違いなく増えてくるので。都市部なんかは半分以上外国人になったりするから。

○飯盛（いいもり）委員

あと、この間、こども未来課には提案したんですが、幼児教育の部分の受け入れ体制とかは関係機関がいろいろ多いじゃないですか。だから、教育委員会とは別に、関係者で集まった会議をそろそろ開いたほうが。

○山口知事

あれさ、国際交流協会で一回ちゃんとやったらいい。

○平尾政策部長

そうですね、そういう子どもだけとかじゃなくて、ちょっと広めの視点でちょっとやるようなね。

○山口知事

やったほうがいいよ。これはワーキングなんか作ってさ。ホームじゃなくてさ。

○飯盛（いいもり）委員

だから、実際に通訳で動かれている黒岩さんのところの通訳の人たちも入ってもらったほうが、現場の声が聞こえてくる。

○藤崎企画監

少年自然の家についてお願いします。

青少年教育にかかる施策の経緯ということで、どうやって始まっていったのかということからお話ししたいと思います。

今後、日本語教育を確立するために、教育基本法、学校教育法が昭和 22 年に制定されています。この規定で社会教育に対する国や地方公共団体の在り方や、学校の向き合い方などが規定されており、文部省では法制しないといけない、教育刷新委員会か、建議かという社会の流れを受けて、昭和 24 年に社会教育法というものが制定されました。

昭和 30 年代になりますと、青少年教育施設の整備が活発化し、33 年には青年の家の整備補助というのが開始されております。

この当時は、まだ社会性訓練の要請に応えるという形で、職場訓練の場というような意味合いが非常に大きかった。昭和 34 年に皇太子の成婚記念ということで、国立の中央青年の家というのが設置されております。そこを契機として、集団の宿泊訓練を行う場というふうに性格が変わってきております。

昭和 40 年代に入っていきますと、工業化、ガス、環境問題、都市化、あらゆる問題の中で、自然でいろんな体験を積むということの重要性というのが認識されるようになりまして、昭和 45 年には公立少年自然の家の施設整備の国庫補助が開始されました。

翌年の 46 年とか 49 年には、社会教育審議会の答申だとか建議とかで、社会教育に関する定義ですね、少年自然の家とか施設の整備拡充をやっていこうというような流れを受けまして、昭和 50 年には初の国立少年自然の家が室戸に設置されています。同じく県内にも黒髪少年自然の家が開所されたのが、昭和 50 年になります。

○山口知事

昭和 50 年が最初なんだ。

○藤崎企画監

はい。

○山口知事

俺が 10 歳。あの頃、真っ盛りだったんだ。

○藤崎企画監

社会教育審議会ですとか、中央教育審議会でも少年が自然で宿泊する、集団で活動するという意義とかというのが、やっぱり重要性が認められて、その施設の整備なりがどんどんここから進んでいくというようなことになっております。

ここから始まって、どんどん増えてきています。これは社会教育調査から少年自然の家の施設数を引っ張ってきていますが、ここで黒髪が開所しています。で、昭和 62 年に北山が開所、平成 11 年に波戸岬が開所し、平成 14 年に全国で 325 施設があったものが、今、約 20 年間で 4 割ほど下がってきています。

施設の老朽化ですとか、人口減少、少子化の問題で、なかなか施設が利用されていないという事で、こういうふうな状況をたどっているのが現状です。

これは九州内の少年自然の家・青年の家の設置状況をまとめたものなんですが、各県の施設数については、佐賀県は県立だけしかありませんが、他県では、国立があったり、市町立があったりというような状況です。

施設の所管部署は、ほぼ教育委員会事務局で持っているんですが、佐賀県だけは平成 24 年に知事部局へ移管しています。いろんな知事部局の施策と一体となって連携してやっていくみたいな趣旨で。

これが参考までに、地図に落とした施設になります。最近、長崎新聞で話題になりました長崎県立千々石少年自然の家が廃止を検討されていて、施設の老朽化もそうですし、県内に県立で 5 か所あるんですが、使用率が少ない。

#### ○山口知事

ということは、さっきの話だと、千々石は補助は昔出たけど、今、改築とか更新とか出ないんじゃないの。だから、造るまではいいけど、あと、みんな困っちゃう。

#### ○藤崎企画監

どんどん造られたときの時代がたっているので、施設自体が古くなっているし、そもそも生徒数も減ってきているので、そこが満たされないというような状況になっています。

湯布院とかはもう廃止していたりとか、全国的な状況としてあったというのが今の状況です。

ここは少年自然の家の学校での活用状況となっています。

#### ○山口知事

俺、不思議なんだけど、うちだけ教育委員会所管じゃないのよ。だから、最初振ったときに、教育委員会はえーっと。(笑い)

#### ○甲斐教育長

今の利用状況なんですが、小学校の 8 割以上が活用しています。

主に小学校 5 年生のとき、4 年生というところも学校によって、6 年生は修学旅行がありますので、その手前ぐらいかなと思います。自然体験学習、集団行動だったりとか、友達、先生との人間関係、あきらめずに粘り強く一連の流れということで、キャンプファイヤーだ

ったりとか、キャンドルのつどいとか、フィールドビンゴとか、波戸岬のカッター体験とか、ほかではできないものを行っています。

中学、高校になると、主に新入生の仲間づくりという感じで、これから新しく学校が始まりますよということで集団生活、社会生活に必要な態度とか、学習ですね、そこで学習もやります。勉強をさせていただいて、大変ありがたい。

どんなことで利用しているかという、例年ここを利用してるからというところを選んでいただくとか、アクセスがしやすいとか、あとほかではできない体験活動があるからというところを選んでくれたことが見受けられました。

以上です。

○山口知事

ということは、飯盛（いさかり）先生は子どもの頃使っていないということ。

○飯盛（いさかり）委員

引率でしか。

○山口知事

引率で。そうですね。

○甲斐教育長

黒髪がオープンして、割とすぐ使いました。

○山口知事

林間学校とか、キャンプファイヤーとか、そんな感じに使っていたんだよね、僕らの時代は。

○飯盛（いさかり）委員

最初のそもそもの立ち上げの頃は、子どもたちの自然体験活動が生活様式の変化が出てきたから、こういったところに集団で連れて行って体験させましょうということでスタートしてずっと、実際子どもたちを見ていても、いい体験の場になったと思うし、子どもたち6年間の思い出の中で結構1番に上げる子どもたちが多かったですね。

ただ、最近になってきて、コロナを除いて2泊3日が主流だったんです。兵庫県は、この前聞いてきた話では、まだいまだに3泊4日を頑張ってるってあるそうです。職員の働き方改革ですね、職員を入れ替えて何とかやりくりして工夫してやっていますというふうに兵庫県の教育長がお話をされていました。

○山口知事

すごいな。

○飯盛（いさかり）委員

佐賀の場合は1泊2日が主流で、それで、本来の目的、自然体験活動が十分達せられているかという、そうはなかなかいかない。今、行事消化型みたいな形になってしまっている。

ただ、自然体験を除けば、子どもたちは友達同士、1泊同じところで寝たりとか、食事を作ったりとかというようなことで、それなりの意義はいまだにあると思います。

自然体験活動で思い出したのが、事前に職員は事前調査といいますか、行くわけですね。こういった活動をやる。飯ごう炊飯のときに、まきをこうやってくべる。まきを割るときになたを使うということで、ある女性の先生が、こんなのやめさせましょう。けがしたら困りますよと。

○平尾政策部長

自然体験にならん。

○飯盛（いさかり）委員

アルコールランプがあるでしょう、理科の実験で。それももうみんな恐る恐るだし、飯ごう炊飯のときはそれを使うんですが、それがなくなってくると、その原理というのも学ぶ機会がなくなっているといったような話も聞いたことがあります。

○山口知事

だからね、一定の意義はあると思うんですよね。

○飯盛（いいもり）委員

行ったら行ったで、思い出には残ると思うんですよ。私もキャンドルのつどいを覚えています。

○飯盛（いさかり）委員

教育委員会管轄であった時代は、教員も社会教育として3年間ぐらい派遣をされていた。

○山口知事

これは何でさ、教育委員会からこっちに来たの。

○藤崎企画監 文化やスポーツ、知事部局で持っている事業があるので、それらの事業と連携することで複合的な効果もあるということで移管しています。

○山口知事

波戸岬は別としてさ、黒髪とか北山って、本当に教育施設っぽいよね。

○平尾政策部長

そうですね。

○山口知事

ちょっと趣が違いますよ。

○加藤委員

うちは波戸岬に毎年生徒たちが行っているんです、250名。やっぱり野外のバーベキューとか、カッター研修とか、すごく鍛えられて帰るなど。1泊2日だけど、とても成長を感じます。一緒にお風呂に入ったこともないからですね。そういう経験とか。

○飯盛（いさかり）委員

お風呂がもう子どもたち、拭いて上がってくるという経験がないから、脱衣所がベチャベチャ。そこに必ず職員がついとかなないと。

○加藤委員

波戸岬少年自然の家の利用率、小・中・高を聞いたんですが、小学生が85%、これは令和4年なんですけど、中学生が6%で、高校生が24%ということで、中学校の利用率がとても低いとおっしゃっていました。

学習指導要領にはうたってあるんだけど、やっぱり校外学習ができにくい状況なんです。

○平尾政策部長

全体的にやっぱり中学校、波戸岬に限らず、黒髪、北山どこもやっぱりそんな役割なんだろうかね。

○甲斐教育長

中学校、オリエンテーションはやっぱり学級づくりというか、学年づくりのためにどこかしらでやっています。だから、少年自然の家じゃなくても、どこかでやっています。



○山口知事

すごい県の予算を使うんですよ、これ。だって1泊300円とかだからね。その分、県が何億もそれぞれ各施設にやっていて、すごい。

○加藤委員

波戸岬は敷地もとても広いです。

○山口知事

いい場所だし、使っているのは半分ぐらい、福岡県と一緒にですよ。

○加藤委員

福岡県の市町は補助金が出ているみたいなんですよ。だから、波戸岬に行きやすい。

○山口知事

本当にすごく安いのに、佐賀県がどかんと支出していて、それにさらに補助を出したら、ほとんどただになる。

○加藤委員

だから来るんですよ。

○山口知事

だから、その辺をいろいろ考えて、何とか波戸岬はいい施設なので、今年うちの予算でいろいろとサウンディング調査というか、いろいろ考えていくというか、その3施設については考えをしっかりしようかなと。

○加藤委員

職員不足について、若い人が来てくれないと言っていました。職員の人たちはすごくいい人たちで、優しくて丁寧。でも3年ぐらいいたら、給料が上がらないから自分たちの生活もできないし…みたいな感じで出ていっちゃうみたいです。

○飯盛（いさかり）委員

10年以上前は、教員採用試験になかなか合格しないという人たちがそこで就職するというようなことを言っていました。

○山口知事

人手不足だし、逆に言えばそういう施設って激しい公費で支援しているから、逆に上げに

くい。自分たちがいい施設にしたから、給料が上がるわけではないので、そういった意味では、昭和な感じのシステムになっていて。

○飯盛（いいもり）委員

北山って委託しているんですか。

○平尾政策部長

3つの少年自然の家全て指定管理で委託ですね。

○飯盛（いいもり）委員

うちのお泊まり保育はいつもフォレストラボを使わせていただいているんですけど、もう定着して、年長さんになったらそこに行って屋外活動して、泊まるのは園に戻ってきてからなんですけど、やっぱりそういう体験をすることが子どもたちの思い出になるので、すごくいい活動ですね。

ちょっとずれるんですが、先ほど佐賀新聞を見て、外国人増加が佐賀県3位はすごいなと読んでいたんですけど、怖かったのが、全国で過去最低86万人も人口減少しているというのを見て、1年間で佐賀県が消えてしまっているよねと。

来年は長崎県が消えます、再来年は宮崎県が消えましたみたいに、ぽんぽんぽんと人が減っているのねと。どうしても佐賀県だけは食い止めていただきたいなと。自然減はなかなか難しいから。

○山口知事

今うちは社会増にしたいくて。だから、もっと早いうちに大学造っておいてほしかったなと。昔は佐賀の子どもたちは4大って行かなかったんだけど、今は半分行くので、3,500人中3,000人が県外に行くんだよ。新しい大学を県立に造るなら、小・中・高のみんなに連携する意味というか、俺たちの頃さ、仮分数とか意味分からなかったよ、勉強させられて。これは何の意味があるんだよと。だけど、大学とかに行けば、こうやって役立つんだよという社会とのルートができれば、小・中・高の勉強もすごく役立つとっていて、フィンランドと同じようにしたい。

○藤崎企画監

それでは、以上をもちまして、第29回佐賀県総合教育会議を終了させていただきます。どうもありがとうございました。